

原シルクロードの形成(2)

—ウズベキスタン、ダルヴェルジン遺跡(第3次)の発掘調査(2022年)—

久米 正吾 金沢大学特任助教

新井 オニ 東京大学助教

ヒクマトウッラ・ホシモフ サマルカンド考古学研究所主任研究員

ボキジョン・マトババエフ サマルカンド考古学研究所教授

The Formation of the Proto-Silk Roads (2): The Third Season of Excavations at Dalverzin, Uzbekistan (2022)

KUME, Shogo Project Assistant Professor, Kanazawa University

ARAI, Saiji Research Associate, The University of Tokyo

HOSHIMOV, Hikmatulla Senior Researcher, Samarkand Institute of Archaeology

MATBABAIEV, Bokijon Professor, Samarkand Institute of Archaeology

1. はじめに

ダルヴェルジン(Dalverzin)遺跡は、ウズベキスタン領フェルガナ盆地を東西に流れるカラ・ダリヤ(Kara Darya)川左岸3kmほどのところに位置する(図1)。カラ・ダリヤ川はやがてキルギスの天山山脈からフェルガナ盆地へと流れ込むナリン(Naryn)川と合流し、シル・ダリヤ(Syr Darya)川となる。本書所収の辰巳報告と同じく、西アジアと中国を起源とする異なる食料生産革命の交錯をテーマとした研究の一環として2018年から発掘調査をおこなっている。

ダルヴェルジン遺跡は、当地最古とされる農耕牧畜文化であるチュスト(Chust)文化を代表する遺跡として、1953年以降、断続的に発掘調査が続けられてき

た(Zadneprovskii 1962)。これら過去の発掘での出土遺物の評価と年代測定あるいは筆者らが新たに測定した年代測定結果によれば、紀元前2千年紀中頃から紀元前1千年紀初頭に年代付けられる。筆者らの調査では、以前の調査においては必ずしも十分に達成されなかった詳細な層位記録による遺跡編年の確立、あるいは25haを測る巨大集落である当遺跡の空間利用の変異について、近年、考古学に幅広く導入された種々の理化学分析を適用することによって、現代的な手法で再検討することを目指している。今回の調査期間は2022年2月18日～23日の約1週間と短期であったため、過去2回の調査で発掘したトレンチの再調査と遺構確認のための小規模な試掘調査を実施した。

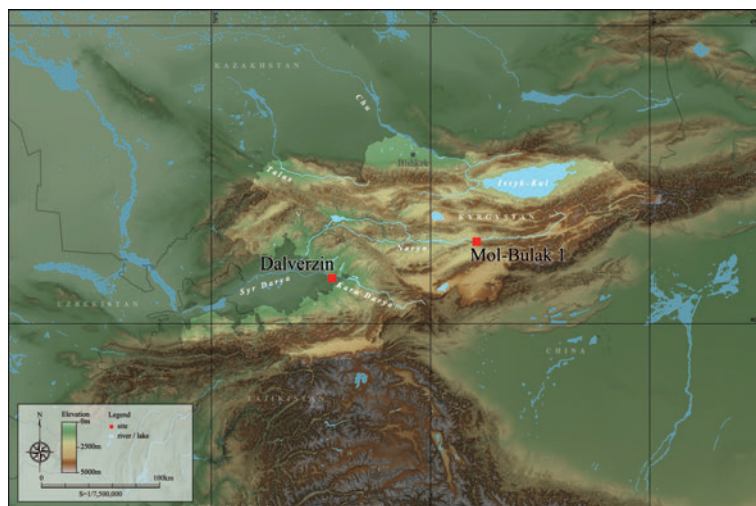


図1 ダルヴェルジン遺跡の位置

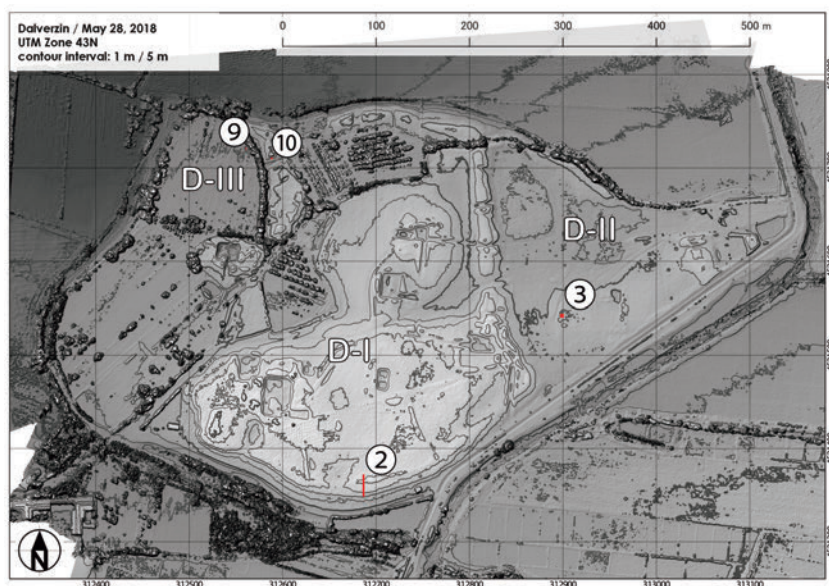


図2 ダルヴェルジンで今回発掘した試掘坑(②、③、⑨、⑩)の位置と地区分割(D-I～D-III)。原図作成は早川裕弐



図3 試掘坑2での発掘風景(南から)

2. ダルヴェルジン遺跡での発掘調査

今回は試掘坑2、試掘坑3の再発掘調査と試掘坑9、試掘坑10での新規試掘調査の計4ヶ所での調査を実施した(図2)。以下に各試掘坑での調査内容について述べる。

2-1. 試掘坑2

遺跡南端に位置する試掘坑2は、2018年の第1次調査で遺跡の層位全体を確認するために長さ24m、幅2mの南北に細長い試掘坑を設け、階段状に掘り下げた発掘区である(久米ほか2019)。今回は、南端

の最下層部で予定していた地山層の確認を実施できなかったため、今回1×2mの範囲を深く掘り下げることによって、地山層への到達を目指した(図3)。

前回の発掘停止面である地表下1.6mから発掘を開始し、地表下3m付近で水が湧き出す可能性が高いと判断できたため、発掘を停止した。その間、いずれの深度でも遺構は認められなかったが、地表下2.2mまでは土器などの遺物が出土した。これらの出土土器はすべて角が取れて丸くなっており(図4)、この発掘範囲が水路や川などの水流環境にあったことがわかる。今回の発掘範囲はダルヴェルジン遺跡全体を囲う周壁の外側にあたるため、周壁外にさらに溝や小河川によ



図4 試掘坑2から出土した角が取れたチュスト土器片

る防御策が講じられていた可能性もある。狭小な発掘区断面からは溝や小河川の断面形状を認めることはできなかったが、今後、より詳細な地形観察や発掘区拡張あるいは地下探査によって、周壁外の防御設備の存在について検討する必要が出てきた。なお、地表下2.2 m以降の深度では、遺物が出土しなくなり、土質も粘土状の堆積物へと変化したため、これ以降を自然堆積すなわち地山層と判定した。

2-2. 試掘坑3

ダルヴェルジン遺跡は周壁の配置状況から西側の五角形状地区(以下D-I区)と東側の三角形状地区(同D-II区)に大別される(図2)が、東側のD-II区は家畜放牧のための空間との見解がこれまで示されてきた。西側と比べ明らかに低く、文化層の堆積が薄いとみられるこの東側のD-II区をそのように解釈する見方は概ね支持できるが、これまでこの地区の本格的な発掘はおこなわれてこなかった。そこで、D-II区の空間利用に関する考古学的証拠を得るために、2019年の第2次調査で4×4 mの試掘坑3を設定し、炉跡や建造物の痕跡を確認していた(久米ほか2020)。一方、出土遺構の分布が極めて希薄であることや短期間の居住を示す層位は、家畜放牧の空間であることを間接的に支持していた。

今回、より直接的な証拠を得る試みとして、土壌DNAを用いた居住環境復元のための土壌サンプリングをおこなった。試掘坑3の北端1×4 mの範囲の埋戻し土を除去し、発掘区断面を完全に露出した上で、前回記録した土層断面図と照合しつつ、断面から土壌サンプルを12点採取した(図5)。なお、同様の土壌サンプリング作業は、前述の試掘坑2、後述の試掘坑9でもおこない、比較対照用のサンプルを確保した。



図5 試掘坑3で採取した土壌DNA用サンプル



図6 試掘坑9の発掘風景(北東から)。背景に果樹園と畑が広がる

2-3. 試掘坑9

西側のD-I区の北西部はさらに厚い周壁で分割されており、周壁の内側には建造物が密集して確認されたことから、この大規模集落を管理する中枢的な機能を有していたことが以前の発掘では想定されている(以下D-III区)。筆者らも2019年の調査でこの周壁に試掘坑6を設け、幅約3.5 mの巨大な周壁を確認している(久米ほか2020)。ただし、周壁の内側は1950年代の発掘開始時から畑地となっており、現在は主に果樹園として利用されている。このため、これまでの発掘調査は畑地の及んでいない周壁周辺に限られており、D-III区の大半の部分の遺構分布については詳しくわかっていなかった。そこで、前回周壁を確認した試掘坑6の20 m西に2×1 mの試掘坑9を設け、周壁内空間の堆積を確認することとした(図6)。

試掘の結果、幅1 mを超えるレンガと練土造りの巨大な壁体で構成される第1期、ならびに開口部が90 cmほどある土坑が存在する第2期の2つの文化層



図7 試掘坑9で出土した土器片。右が大型把手。左の上下2点には彩文が見られる

が確認された。特に、第1期の壁体の良好な残存状況から判断すると、畑作により表層の削平はかなり進んでいると思われるものの、地中下の遺構は概ね良好な状態で保存されており、大規模な建物群がこのD-III区には広がっている可能性が高い。なお、深度1.8mより下は発掘区全面を覆う径3~5cm大の砂利層となった。このため、ダルヴェルジン遺跡一帯が、現在は遺跡の北3km付近を流れるカラ・ダリヤ川の河床となっていた時期が過去にはあるものと見られる。

出土遺物の詳細な分析はこれからだが、チュスト文化の示準遺物である赤色磨研土器を主体とする土器組成は他の試掘坑と大きく変わらない。ただし、彩文が施される赤色磨研土器の頻度が他の試掘坑よりは高い印象を受けた。また、大型壺に付属したと思われる幅6cm程もある把手が出土したが、その焼成の良好な鈍黄色系の胎土は、橙色系の胎土を有する赤色磨研土器群とは明らかに異なる(図7)。そもそも把手付土器はチュスト文化では稀であるため、チュスト文化に後続するエラタン(Eilatan)文化の文化層がD-III区の最上層に存在していることを示唆しているのかもしれない。補足となるが、以前のD-II区の発掘では、最上層にチュスト文化とエラタン文化の移行期文化層が確認されている。その他の遺物としては、紡錘車の未成品など土器片を再利用した土製品や磨石類など、これまでの発掘でも一般的に見られる遺物が少量出土した。

2-4. 試掘坑10

前述したD-III区を区切る大型の周壁を確認した試掘坑6の南側10m付近の地点は、現在D-II区からD-III区へ流れる水路が切られ、周壁もそこで分断さ



図8 水路で分断されたD-III区の周壁(東から)。北側(写真右)の周壁端部に試掘坑10を設けた(矢印)

れている(図8)。分断された周壁の端部には水路を切った際の排土と思われる高まりが確認されるため、近代以降に遺跡が畑地へと転換される際に土地改変が起こった可能性が高い。一方、水路への土地改変以前からこの断絶部はD-II区とD-III区をつなぐ出入口であったために容易に水路を設けることができた、との想定も排除できない。そこで北側の周壁端部に2×2mの試掘坑10を設け発掘を実施した。

発掘の結果、最大深度1.5mほどまでは水路を切った際の排土層と思われる一様な堆積物で覆われていたが、その下から人工物と思われる硬化面が現れた。調査期間の都合上、この硬化面を詳しく観察することはできなかったため、周壁の一部なのか、それ以外の構造物なのかについては詳しく調べることができなかった。来季以降、発掘範囲を広げることによって、この周壁断絶部の性格を詳細に明らかにしたい。

3. まとめ

これまで記してきたように、今回の調査では、4ヶ所の試掘坑を短期間で調査したが、思いがけずユニークな成果が得られた。試掘坑2の発掘では、溝や小河川による周壁外の防御施設の存在が示唆され、集落全体の構造復元に関する新たな課題を得た。まだ結果は得られていないが、試掘坑2、3、9で採取した土壌DNA分析サンプルは、この遺跡の居住環境を新しい手法で復元する機会を提供するものと期待される。試掘坑9、10では、残存状況良好な遺構群が果樹園や畑地の下には眠っていることを予想させ、これまで詳しく調べられてこなかったD-III区全体の広域調査を実施する動機づけとなった。当然、D-III区の広域調査

にあたっては、果樹園や畑を営む土地所有者との調整など困難も数多く予想される。このため、発掘のみならず、非破壊の地下探査を併用するなど、様々なアプローチからのチャレンジを模索することとなろう。

調査期間中に実施した動物骨の同定作業では、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、イノシシまたはブタ、ならびに小型の齧歯類が確認された。今回の小規模な発掘調査では標本数が限られているが、以前の標本と合わせ、動物資源消費の時間的・空間的な変異を調べるための情報が蓄積した。また、併行して動物骨から同位体分析用のサンプルを採取し、日本に輸送した。国内で現在分析中のダルヴェルジンの家畜の食性評価についても近く明らかにできる予定である。

今回の調査は、JSPS 科研費 JP18H03608(代表：今村薫)、JP21H04357(代表：久米正吾)、MEXT 科研費 JP20H05816(代表：中村慎一)の助成を受けて実施した。

■参考文献

- ・久米正吾ほか 2019「中央アジア初期農耕牧畜民の交流から東西交渉の始まりを探る－キルギス、モル・ブラク1遺跡(第2次)、ウズベキスタン、ダルヴェルジン遺跡(第1次)の発掘調査(2018年)－」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』41-45頁 日本西アジア考古学会。
- ・久米正吾ほか 2020「中央アジア初期農耕牧畜民の交流から東西交渉の始まりを探る－キルギス、モル・ブラク1遺跡(第3次)、ウズベキスタン、ダルヴェルジン遺跡(第2次)の発掘調査(2019年)－」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』56-61頁 日本西アジア考古学会。
- ・Zadneprovskii, Yu. A. 1962 Drevnezemledel'cheskaya kul'tura Fergany. MIA 188, Moscow and Leningrad, Nauka.